

---

# 空白にあるもの

NAO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空白にあるもの

### 【著者名】

NAO

### 【あらすじ】

人は何かを比べて生きていいく。それが誰かを傷つけると分かっていても、人は何かを比べなくては生きていけないのだ…

車のエンジンが僕を揺らす。

早く走らせてよ、と僕を催促するかのように。

僕は、しつとりとしたバラードを車内に響かせながら、白い雪がフロントガラスに落ちるのを眺めていた。一つ、また一つと、フロントガラスに雪が積もつていく。そして、僕は思いついたようにワイヤーを動かし、雪を払う。

もうすぐ、彼女はここにやってくる。

フロントガラス越しに見えてくるであろう彼女の姿を思い浮かべてみる。真っ白な「コード、首もとには大きなフェイクファー、黒いロングブーツを履いてくる。そんな予感がした。

僕は、座席を倒して、エンジンを切った。車は力を失つておとなしくなり、バラードを歌つていた女性シンガーも、サビの途中で歌うのをやめた。車内が、静寂に包まれる。深々と降り続ける雪の中で、僕は大好きな映画で流れてくるメインテーマを口笛で表現した。目をつぶると、すぐにでもその情景を思い出すことができる。台詞まで、鮮明に。

「また、観たいな……」

僕は、口笛をやめてつぶやいた。高い音程になると、決まって上手く口笛をふけない。高い音程を出したくて唇をどんどん細めていくと、しまいにはただの吹く息と化してしまつのだつた。唇を湿らせて再度挑戦するも、やはりそこで吹けなくなつてしまつのだ。

印象的な曲、幻想的なシーン。いつでも僕の頭の中で上映できるのに、音楽だけは再現できない。まるで背景音楽のない、映画だつた。

僕はため息をつく。

ガラスがノックされる音に僕は体を起こす。僕の想像通りに白いコードを着たアキが二コ二コしながらドアの脇に立っている。少し

かがんだ体勢で足踏みをしているアキを、僕は車の中に招き入れた。

「寒くて凍えちゃう」「う

エンジンをかけて車内のエアコンを入れると、勢いよく温風が飛び出した。続けて、歌うのを中断させられていた歌姫も歌いだす。

「よく寒いのを我慢できるね」

凍つた手をこすりながら、僕のほうに笑いかける。頭に積もった雪が車内の温度で溶けて、水の玉になつていぐ。

「雪国出身だから」

「そういう問題なのかな」「う

首をひねつて考え込む。

「南極に住んでいる人が、北海道に来るようなもの?」

「極端に言えばね」

「ふうん、そんなものなんだ」

アキは神妙な顔つきで、温風を握り締める。

「ふと思つただけど」

アキは、思いついたように僕に顔を向ける。

「何?」「う

「昔、雪合戦したよね」

「学校の校庭での話?」

「そうそう」「う

アキは高校時代の思い出話をしているようだつた。思い出して、はにかむように笑つて、白い歯がこぼれる。

「あの時は」「めんね」「う

「いまさら、だけどね」「う

「でも、あの時は本当にあせつたんだよ。まさか、気絶しちゃうとは思わなかつたから」「う

「雪の中に特大の石を詰めた時点で、気が付いて欲しかつたよ。もし頭にぶつかつたらどうなるか、とか」「う

「シンならよけると思ったから。シンだつて、私が女だつて」と志  
れて、ばしばし雪をぶつけるんだもん。私、悔しくて……」「う

「それで、石を詰めて、倍返し?」

アキはふくれつ面で小さくうなづいた。頬が紅色に染まっているのは、恥ずかしさからか、外気温のせいか。とにかく、僕はそいつた表情豊かなアキに親近感を覚える。春夏秋冬が、そのまま喜怒哀楽になつたような、感情のはつきりした女性。見ていてこちらまで楽しくなつてくる。

「悔しかつたんだよ

「何で?」

「いつつも、私の負けだつたから」

僕は、座席を元の高さに戻して、アキを窺つた。

「シンは、いつも私に勝つてた。そうでしょ?」

「それは、絶対評価で、だろ。点数で評価されれば、仕方ないさ」「絶対評価でも、相対評価でも。とにかく、当時は、連戦連敗だつた」

「でも、今は違う」

「うん。そんな風にシンのこと見てないから」

「なら良かつた」

僕は、ブレーキペダルを踏みつけ、サイドブレーキを下げる。シフトをドライブに入れると、車はまるで散歩に行きたがる犬のように尻尾を振り、体をゆする。

「シンは、どんな風に見てたの?」

駐車場から抜けて、国道へと入る信号機で、車は再び停車する。

「妹」

ワイヤパーを忘れていたので、作動させながら僕は答えた。雪が視界から払われる。

「妹だよ」

反応が返つてこないので僕は繰り返した。

「かたやライバルで、かたや妹、か。その差は歴然だね」

「差なんてないだろ。何でも比べたがる癖、やっぱり直つてないな

「……そうみたい」

「フォローではないけど、悪い癖だって言つてるわけでもないから、信号が青へと変わる。

「比べることって大事だと、僕は思う」  
雪をまとった情景がフロントガラスをすり抜けていく。

「自分や相手を比べることも?」

「大事だと、思つてる」

「普通、あんまり言わないよね、そういうつ答え。人から嫌がられそう」

「ほら、比べてる」

「屁理屈」

「……そうだけじゃ。比べることから、感情は生まれるんだと思う。『あの人気が好きだな。じゃあ、つりあつとうに努力しよう』……つりあつてことは、比べるつてことじやないかな。ほかにも、僕らは知らず知らずのうちにさまざまなもの比べてるんだと思つ」

アキは少し悲しそうな表情を見せた。

「……だからのかな」

ワイヤーの音がむなしく響いた。

「私がシンにふられたの」

温めていた手をコートのポケットに入れる。

「雪合戦のとき、シン、保健室に運ばれたでしょ?」

「うん」

「あの時、私、傍にいたよね?」

「いた」

「ずっと、傍にいたよね?」

「……いた」

「嘘」

窓の外に目を向けているアキは、外を見ていたのだろうか。それとも、僕の顔を見たくないからそうしているのだろうか。

「空白の時間。僅か三十分だけど、とても大きな時間。私は、シンの傍を離れて、保健室を出た。シンは、そのとき起きてたんだよね

？」

「……」

「そして、戻ったとき、シンは何事もなかつたかのように寝ていた。ううん、寝たふりをしていた」

方向指示をあげて、斜線を変更する。赤信号の下に青い矢印が点灯したので、僕はハンドルを左に回した。図ったかのように、バーードが終わり、車内は静まり返つてしまつ。

「何があつたの？ あのとき。私と、シンと、先生と三人しかいなあの空間で、私だけがいなくなつたあの時……」

前を行くバスのナンバーを見つめ続ける。見つめ続けてはいたが、記憶されることは絶対にない。

「私、本当は知つてゐる。でも、自分から言いたくない。でも聞きたい。シンに否定して欲しい。でも事実だつて知つてる。ぐるぐる回るの。私の頭の中に。もしかしたら、もしかしたら、つて。想像が、妄想になる。心が痛くなつて、そんな想像やめたくて、でもやめられなくて。苦しくて、思い出して、可能性を探つて、空白に時間を埋めるために。事件を捜査する刑事みたいに。アリバイとか、聞いたりもした。でも、否定できなくて。私……傷つきたくない。怖いの。でも、このまま知らないでいるのも嫌」

運転する僕に向かつて、自嘲気味に笑うアキ。そして、暗い闇の中に沈んでいく。

「比べてるんだよ……。このまま事実を知らないでいる私と、事実を知つた後の私を。その、心の痛みを」

「……あれから、一年がたつけど、僕達は今でもその三十分を大切な時間だと思ってる」

僕はハンドルを握り締める。

「……こんな痛みだつたんだね。予想以上だよ……」

行くあてもなくハンドルを回す僕の車は、ただ街中を迷走するだけ。いやおうなしに、この車という矮小な空間は、一人の痛切な感情を閉じ込める。

捌け口もなく、膨れ上がっていく車内の空氣に、僕はパンクしそうだった。

それは、アキも同じだったろう。

「ひとつ言つていいかな」

僕は首肯の意味を込めて黙っていた。

「シン、好きだよ」

「……ごめん」

「好き」

「……ごめん」

「ずっと昔から、好きだったよ。本当だよ」

「ごめん……」

嗚咽が聞こえてくる。僕の目をはばかることなく、落涙で雪のようなコートを濡らす。涙というのは、こんなにも頬をつたうものなのだろうか。一滴の涙なんて態のいいものではない。まさに滂沱だつた。

何もできず、何も言えず、僕はただ車を走らせる。

「雪合戦なんて、しなければよかつた」

それが、彼女の最後の言葉だった。雪合戦……その言葉の陽気さとはあまりにもかけ離れた結末。

迷走していく車から降りたアキは、僕に背中だけを向けて歩いていく。

白いコートに、黒いロングブーツ。

昔から仲が良くて、いつも一緒にいて、誰よりも身近だった存在。誰よりも話をした人。誰よりも僕を知っている人。

誰よりも……。

そうして僕は比べていく。

たとえ誰かを傷つけるとしても。たつた一つの大切なものを、これからも大切にしていくために。

(後書き)

興味を持つてくださつた方、読んでくださつた方、ありがとうございます。空白に何があつたかは、作者自身考へていません。つまり、行き当たりばつたり小説です！！ ゴメンナサイ。こんな小説でよければ、感想・批評待つてます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4505a/>

---

空白にあるもの

2010年10月8日15時33分発行